CLAIR REPORT No.496

シンガポールの文化芸術政策にみる
地域アイデンティティの確立と多文化共生

Clair Report No. 496（February 6, 2020）
（一財）自治体国際化協会　シンガポール事務所

一般財団法人
自治体国際化協会
CLAIR

「CLAIR REPORT」の発刊について

当協会では、調査事業の一環として、海外各地域の地方行財政事情、開発事例等、様々な領域にわたる海外の情報を分野別にまとめた調査誌「CLAIR REPORT」シリーズを刊行しております。

このシリーズは、地方自治行政の参考に資するため、関係の方々に地方行財政に係わる様々な海外の情報を紹介することを目的としております。

内容につきましては、今後とも一層の改善を重ねてまいりたいと存じますので、御叱責を賜れば幸いに存じます。

本誌からの無断転載はご遠慮ください。

問い合わせ先
〒102-0083 東京都千代田区麹町 1-7 相互半蔵門ビル
（一財）自治体国際化協会 総務部 企画調査課
TEL: 03-5213-1722
FAX: 03-5213-1741
E-Mail: webmaster@clair.or.jp

はじめに

1965年にマレーシアから独立したシンガポールは国土や資源に乏しく、独立当初は経済発展の可否が国家の存亡を直接左右する状況であったため、当初は経済発展そのものが国家目標であり、文化及び芸術は経済発展のための一つの手段とみなされてきた。

強力な政府主導による経済政策は奏功し、シンガポールは一人当たりGDPが日本に大きく水をあけるほど世界でも有数の富裕国として成長を遂げた。他方、こうした状況において、シンガポールには独自の文化形成の余地がなく、「文化の不在」や「文化の砂漠」[1]などと揶揄されてきた背景がある。

経済発展を遂げたシンガポールは「文化の砂漠」から脱却するため、文化創造に向けての政策を開始した。当初のプランにおいては、ハード面の整備やイベント開催に対する助成など文化芸術インフラの基盤の強化が前提であったが、それは文化芸術をエンタテインメント産業として捉え、さらなる経済発展のために活用していくといった志向のものであった。

しかし現在では、シンガポールがその成り立ちや社会背景等により抱えている固有の課題として多民族共生やアイデンティティの確立が急務となっている。このため、シンガポールの文化芸術政策は国民のアイデンティティを確立する方針を軸とした文化的な人づくりに重点を置く内容へと、大きな方針転換が図られている。

先日、日本では改正出入国管理法が可決され、今後多くの外国人が日本へ押し寄せてくる見込みである。その奔流の中で、多文化・多民族共生の推進や地域のアイデンティティをどう構築していくかなどの課題が浮上してくるであろう。本稿ではそれらの課題に対し、シンガポールが多民族国家としての共生とアイデンティティをどのように構築しようとしているのか文化芸術政策の側面から考察し、日本における多文化・多民族共生のヒントを得ることを試みたい。

地方自治体をはじめ、関係者の皆様に本稿をご活用いただくとともに、内容改善のためのご指摘やご教示をいただければ幸いである。

一般財団法人自治体国際化協会シンガポール事務所長

[1] 田村慶子（2013）『シンガポールを知るための65章（第3版）』、P.91

目　次

はじめに 1
概要 3

第１章　シンガポールにおける文化芸術政策の現状と展望 4
　第１節　表現の自由と文化芸術 4
　第２節　文化芸術を通したアイデンティティの再構築 5

第２章　文化芸術政策の遷移と重点施策 7
　第１節　文化芸術政策の遷移 7
　第２節　ルネッサンス・シティ・プラン（Renaissance City Plan） 7
　第３節　アート・アンド・カルチャー・ストラテジック・レビュー（ACSR : The Arts and Culture Strategic Review） 9

第３章　行政機関 13
　第１節　組織変遷 13
　第２節　文化コミュニティ青年省 14
　第３節　芸術評議会（NAC : National Arts Council） 15
　第４節　国家遺産局（NHB : National Heritage Board） 17

第４章　文化芸術教育 19
　第１節　中等教育～前高等教育（secondary school～junior college） 19
　第２節　高等教育（University） 20

第５章　文化芸術事例 22
　第１節　日本とシンガポールの文化芸術施設の比較 22
　第２節　文化芸術施設 23
　第３節　文化芸術イベント 29

第６章　文化芸術政策の各指標にみる成果 32

おわりに 34

参考文献 36

概要

シンガポールの文化芸術政策は、当初は経済成長的な意味合いの強い政策であったが、近年では芸術を通して心豊かな人間形成を目指す政策へと様相を変えている。

大きな流れとして、当初はハード整備や文化芸術への投資を引き金に、文化芸術の持つポテンシャルを観光事業の推進等に活用することをねらいとしていたものが、文化芸術自体をシンガポール人としてのアイデンティティを投射するもの、また人づくりに資するものとして捉える動きが出てきている。

本稿では、シンガポールの成り立ちや社会背景に端を発する特有の課題である多民族共生と、アイデンティティ確立の一助として注目されつつあるシンガポールの文化芸術政策に焦点を当て、その変遷と背景、関係機関の役割、政策の成果等について調査・研究を行った。調査・研究の方法としては、政府発表資料や現地の報道を主体とした文献調査の他、関係機関の訪問調査等を基本とした。

第１章では、シンガポールが文化芸術を通して構築を目指している国家のアイデンティティ等について考察する。

第２章では、文化芸術政策の遷移と、現在の重要施策について紹介する。

第３章では、文化芸術政策を所管する行政組織とその変遷について説明する。

第４章では、文化的な人づくりに主眼を置いたシンガポールの文化芸術教育について説明する。

第５章では、事例としてシンガポールの文化芸術施設やその取り組みについて説明する。

第６章では、シンガポールの文化芸術政策がどのような成果を上げているか説明する。

【注】本稿において特に断りがない限り、ドルはシンガポール・ドルを指す。

第１章　シンガポールにおける文化芸術政策の現状と展望

第１節　表現の自由と文化芸術

シンガポールでは憲法第 14 条[2]により、言論と表現の自由が規制されている。表現の自由が制限される中で、どのようにして芸術活動は行われているのであろうか。

先に結論を言うと、表現の自由が制限されているので当然といえるが、どのジャンルの作家も検閲と自主規制を意識しながら創作活動を行っている。そうせざるを得ないのが現状である。

言論の自由について少し触れると、シンガポール政府はマスコミに介入し、厳しい監視の目を光らせている。1971 年には政府の英語教育重視政策を批判した記事の編集者４名が逮捕されており、それらの新聞の経営株を取得して、編集者人事に介入を始めた歴史がある。現在、シンガポール国内で発行される新聞は全て、東南アジア最大の出版企業であり実質シンガポール政府が管理しているシンガポール・プレス・ホールディング（SPH）の傘下にある。さらに国営メディアはもちろんのこと、私営ラジオも主管大臣の許可を受けなければならないなど、非常に厳しい監視がいきわたっているといえる。[3]

表現の自由については、例えば 1996 年にはインターネットコンテンツに対する規制政策が実施されている。ポルノなど海外からの有害情報は政府が独自に作成した禁止サイト一覧に基づき、プロバイダにアクセス防止もしくは有害情報の除去を義務付けた。この規制は欧米から批判を受け、いったん大幅緩和に踏み切ったが、現在でも政府による監視体制は続いているのが実態である。

表現の自由への規制と創作活動は折り合わない面が多々あると考えられるが、かつては政府批判色の強い劇団メンバーの逮捕など強権的な対応が目立った政府も、1990 年代に入りルネッサンス・シティ・プランなどの文化芸術政策を経て、国際的なクリエイティブ都市としてのイメージ戦略を重視し、柔軟に対応しているというスタンスを示し始めている。しかしながら、政府によるコントロールの姿勢は依然として続いているといえる。

一例を挙げると[4]、2010 年頃に、海外で活動していた著名なシンガポール人芸術家への助成金が「国内での活動成果が乏しい」という理由でカットされた。これは今後、海外でなくシンガポール国内に自国の芸術を還元するようにといった政府のメッセージであったのだが、そもそもこの芸術家が海外で活動していたのは政府の方針によるものだったのである。当初、政府にはシンガポールのグローバル都市化のために、良質な

---

[2] Article 14 of the Constitution of the Republic of Singapore, specifically Article 14(1), guarantees to Singapore citizens the rights to freedom of speech and expression, peaceful assembly without arms, and association. However, the enjoyment of these rights may be restricted by laws imposed by the Parliament of Singapore on the grounds stated in Article 14(2) of the Constitution.

[3] 田村慶子（2013）『シンガポールを知るための 65 章（第３版）』、pp.88-89

[4] 田村慶子（2013）『シンガポールを知るための 65 章（第３版）』、pp.105-110

シンガポール芸術を作成する芸術家を海外に紹介することで、シンガポールが文化にあふれて活気があり、クリエイティビティな人材が住むにふさわしいことを他国にアピールしたいという思惑があった。しかし、それ以前から行われていた外国人受入施策[5]への批判を受け、「国内安定重視」に政府が方向転換したため、先述の助成金カットにつながったのである。この急な方針転換は芸術家たちから反発を受けたが、芸術家は表現の自由の制約だけでなく、政府の方針によっても活動場所や活動内容が制限されていることがこの事例からも窺える。

文化芸術のさらなる発展のために、検閲の緩和等により表現の自由を建設的な方向にシフトさせる必要性や、政府の方針転換の際の芸術関係者との擦り合わせ等の必要性が今後議論される可能性はある。

第２節　文化芸術を通したアイデンティティの再構築

他方、2012 年から施行されている現行の文化芸術政策「アート・アンド・カルチャー・ストラテジック・レビュー（ACSR：The Arts and Culture Strategic Review）」によって、文化芸術は全ての国民を対象とした国家アイデンティティを再構築するトリガーとして見なされるようになった。

しかし、多民族国家であるシンガポールでは国民的なレベルでのアイデンティティを確立しにくい状態にある[6]。本項ではシンガポールのアイデンティティとは何を指すのか、またはどのように位置づけられていくものなのかを考察したい。

まずシンガポール国民のアイデンティティについて、峯山政宏氏が著書において一つの提起をされているので、以下に引用する。

「シンガポール人というのは元々、中国、マレーシア、インド、その他アジアの地域から移住してきた人々の子孫であり、人種だけでなく、文化も宗教もそして、言語も異なるため、共通するものが何１つないのだ…（中略）…よって、彼らが、シンガポール人のアイデンティティを模索しようとして、自分たちの民族の歴史や宗教を振り返った時に、そこに登場するのは、中国、マレーシア、インドという国家そのものの歴史であり、彼らが信仰している、仏教、キリスト教、イスラム教、道教、ヒンズー教などの宗教そのものの存在であるので、シンガポールとして共通して持っているアイデンティティは存在しない…（中略）…シンガポール人が日常生活で話す訛の強い英語、つまり、イギリス人やアメリカ人などの英語ネイティブの方が一度聞いただけでは、聞き取れないシングリッシュという言語と、チキンライス、バクテーなどのシンガポールのソールフードこそが、シンガポール・アイデンティティであるという答えにたどりついた」[7]

---

[5] クレアレポート No.392「シンガポールにおける外国人受入施策」を参照。本稿では取り上げない。以下、クレアレポートについては同様。

[6] 川崎賢一（2016）『リー・クアンユーの死とシンガポールの文化政策・文化制度の将来』、P.166

[7] 峯山政宏（2018）『なぜ？シンガポールは成功し続けることができるのか』、P.189-192

確かに、シングリッシュなどのシンガポール独特のいわば方言に近い言語や郷土料理などはアイデンティティと見做すことができると考えられる。もちろん、細かいところを拾えば、国籍や国歌なども共通項といえるが、方言や料理など住民の生活に直結している要素のほうがよりアイデンティティを認識できる引き金として意識しやすいだろう。ただ、シングリッシュは中国語訛りであるし、料理に関してはインド系のカレーやビリヤニなどもある。このような観点において、多様な民族性や文化性を一括りにすることは容易ではないといえるだろう。

また、文化学者である川崎賢一氏は次のように述べている。

「多くの人々がディアスポラ（国外移住者）であり、しかも、同時に多文化的国家を標榜しているから、本当の彼らのアイデンティティがわかりにくくなっている。中国、マレー、インド等のエスニックアイデンティティだけを支えにしている人々は特に問題はない。しかし、英語で仕事をして、国際的－シンガポールでは国際的にならざるを得ない－に活動している人にとってシンガポール的とは混合的アイデンティティないしハイブリッドアイデンティティのことを実質的に意味するのだ。この国では、ナショナリストになろうとすると必然的にコスモポリタンになってしまうのである」[8]

他方、国民的なアイデンティティと都市及び国家のアイデンティティを別のものとして捉える考え方もある。大学教授である志賀野桂一氏は多様なコンテンツそのものではなく「方法論的同一性」に着目し、シンガポールの都市のアイデンティティは「ダイナミック・ケイパビリティ（dynamic capabilities）」、つまりシンガポールが非常に得意とする「急激に変化する環境に対処するために組織内外の資源を統合、構築、そして再構成する能力」ではないかと考察している。[9]

この「ダイナミック・ケイパビリティ」の確立のため、シンガポール政府が文化芸術政策をどのように位置づけ発展させてきたか、次章以下で紹介していきたい。

[8] 川崎賢一（2006）『トランスフォーマティブ・カルチャー』、P.233

[9] 志賀野桂一（2014）『熱帯グローバル創造都市国家・シンガポール急成長の謎に迫る―そのダイナミック・ケイパビリティと文化政策―』、P.119

第２章　文化芸術政策の遷移と重点施策

第１節　文化芸術政策の遷移

マレーシアから独立して 20 年ほどは、シンガポールは経済発展や政治的安定を重視し、シンガポール社会の基礎を固めその発展を続けるためのインフラ作りを優先してきた。この時代は文化政策がなされることがなく、「文化の砂漠」期と呼ばれることが多い。

1989 年、文化芸術評議会（ACCA：Advisory Council on Culture and the Arts）が設立され、「文化芸術に関する諮問委員会報告書」において、芸術文化制度を作ることが提言される。この計画では、今後の文化芸術普及のために芸術評議会（NAC：National Arts Council）の新設や美術館等の建設が明記された。

それを受け、1991 年に NAC、1993 年に国家遺産局（NHB；National Heritage Board）が設立された。NAC はアーティストへの助成金の交付などの支援を行い、NHB は美術館・博物館などを運営する組織である。

その後具体的な政策として、2000 年に中期計画である「ルネッサンス・シティ・プラン（Renaissance City Plan）」が発表される。具体的な内容は次項で述べるが、この政策はプラン１からプラン３まで３つの段階を経ることとなる。

そして 2012 年に、2025 年までの長期計画である「アート＆カルチャー・ストラテジック・レビュー2012：Arts and Culture Strategic Review 2012（ACSR）」が発表される。この政策ではそれまでインフラ整備あるいは経済戦略的な毛色が目立った「ルネッサンス・シティ・プラン」から視点が変わり、国民がアートに触れやすい環境づくりや、文化を通した国家アイデンティティの再構築など、人づくりに目を向けた政策となっているのが特徴である。

第２節　ルネッサンス・シティ・プラン（Renaissance City Plan）

（１）　ルネッサンス・シティ・プラン１

2000 年に、2000 年から 2004 年までの５か年計画である「ルネッサンス・シティ・プラン１（Renaissance City Plan 1）」が発表された。

内容としては文化芸術の基盤の強化が中心的な方針として謳われているが、計画のビジョンとして「Our industries are supported with a creative culture that keeps them competitive in the global company」[10]と謳われている他、今後の経済発展に求められる創造力を文化芸術教育を通して養う方針などが述べられており、文化芸術政策が経済成長のために推進されることが前提となっているような色合いが強い。

具体的な施策としては、博物館等のハード整備や芸術教育への投資、アートフェスティバルなどの既存イベントの強化、新規イベントの開発などの施策が策定されている。

予算としては、当時の文化芸術政策所管であった情報芸術省（MITA：Ministry of

[10] RENAISSANCE CITY REPORT（2000）、P.5

Information and the Arts）が 2004 年までの 5 年間で新たに 5,000 万ドル（当時のレート（1 ドル=62 円で約 31 億円）を編成した。

【プラン期間中の主な実績】

◯2001 年：シンガポール国立大学（NUS：National University of Singapore）に「ヨン・シュー・トー音楽学科（Yong Siew Toh Conservatory of Music)」を設立。

◯2002 年：コンサートホールとシアターを中心とした総合芸術文化施設である「エスプラネードシアター」がオープン。

◯2003 年：シンガポール最古で最大規模の博物館であるシンガポール国立博物館の拡張工事開始[11]。

◯2004 年：旧国会議事堂を改築し、絵画展示及び映画や演劇の上演を行う「アートハウス」を完成。

（2） ルネッサンス・シティ・プラン 2

2005 年に、同年から 2007 年までの 3 か年計画である「ルネッサンス・シティ・プラン 2（Renaissance City Plan 2)」が発表された[12]。

クリエイティブ産業（プラン内では特にアート産業やデザイン産業を指す）の開発戦略などが挙げられている。文化芸術産業をシンガポール経済にとって価値があるものとみなし、シンガポール政府観光局（STB：Singapore Tourism Board）と積極的に協力しながら、文化芸術の持つ経済的なポテンシャルをさらに推し進める政策となっており、プラン 1 と同様に文化芸術政策が経済戦略的な志向で捉えられているといえるだろう。

具体的な施策としては、全教育課程における芸術教育の組み入れ、大型美術展の開催、美術館や博物館の展示品をインターネットで閲覧できるコンテンツの立ち上げなどが明記された。

【プラン期間中の主な実績】

◯2006 年：現代美術展示会「シンガポールビエンナーレ」の第 1 回を開催。

（3） ルネッサンス・シティ・プラン 3

2008 年に、「ルネッサンス・シティ・プラン 3（Renaissance City Plan 3)」が発表された[13]。名目上は 2011 年までの計画であったが、実際はシンガポール建国 50 周年の 2015 年を見据えて作成されたものである。

これまでの計画と比べると、ワールドクラスの文化芸術地区を発展させる必要性が謳われたり、イギリスやフランスなどにおける芸術イベントへの地元アーティストの出展等、他国との芸術イベントや機関との連携の強化など、より「国際的な文化都市」を意識した内容となっているのが特徴である。また、この政策から文化芸術が国家の

---

[11] 2006 年に完了。

[12] RENAISSANCE CITY 2.0（2005）

[13] RENAISSANCE CITY PLAN Ⅲ（2008）

アイデンティティを映し出すものとして明記され始めている。

具体的施策は、「School of the Arts（SOTA）」の創設や、人民協会（People's Association）[14]と協力したコミュニティセンターでの文化行事の開催などである。

【プラン期間中の主な実績】

◯2008 年：シンガポール初の中等～前高等芸術専門学校である「SOTA : School of the Arts」[15]を開校。

◯2010 年：マリーナベイサンズにおいて美術展覧会「アートステージシンガポール」を開催。

◯2011 年：1986 年から隔年開催されていた出版イベント「シンガポールライターズフェスティバル」の毎年開催への移行。

第 3 節　アート・アンド・カルチャー・ストラテジック・レビュー（ACSR : The Arts and Culture Strategic Review）

2012 年、「アート・アンド・カルチャー・ストラテジック・レビュー（ACSR）」[16]が発表された。これは 2025 年までの長期計画となっており、美術館等の整備に加え、芸術を通して心豊かな人間形成とシンガポールの伝統を大切にし、シンガポール人としてのアイデンティティを育成することを目的とした最新計画である。

ルネッサンス・シティ・プランにおいて度々言及があった"business"や"economy"といった経済戦略を匂わせる表現が影を潜めているのが興味深い。シンガポールの文化芸術政策において、経済成長から文化的な人づくりへとシフトしたことが分かる重要な計画である。

これまでのルネッサンス・シティ・プランは文化芸術の役割を国家の強化や経済発展というところに置いてきたが、ACSR では「シンガポールの人と社会」を発展させる次の段階を望み、文化芸術が「シンガポールらしさやシンガポール人としてのアイデンティティ」の形成に重要な役割を持つと謳っている。2025 年までの目標を「文化的で優雅な国民が、シンガポール人であることへの誇りを持った、帰る場所である国家となること（A nation of Cultured and gracious people, at home with our heritage, proud of our Singaporean identity）」[17]としている。また、ACSR の中で特に強調されている点は、「文化芸術が国民の生活において無くてはならないものとすること」と「幅広く適切な才能により文化的活動や芸術品を生み出すこと」である。具体的な目標として、2025 年までに国民のアート鑑賞を 40 パーセントから 80 パーセントに、アート活動を 20 パーセントから 50 パーセントまで引き上げることなどが掲げられている。

---

[14] 文化コミュニティ青年省（Ministry of Culture, Community and Youth）の法定機関。政府が地域活動を行う拠点として設置され、地域住民への支援を行っている。

[15] https://www.sota.edu.sg/about-us（SOTA ホームページ）

[16] THE REPORT OF THE ARTS AND CULTURE STRATEGIC REVIEW（2012）

[17] THE REPORT OF THE ARTS AND CULTURE STRATEGIC REVIEW（2012）、P.15

これまでの計画と大きく異なる点として、2012 年の発表前の 2010 年に、計画を作成するための協議会[18]を作り議論を重ねるとともに、2010～2011 年にかけて、国民からシンガポールの文化芸術やその取り組みについて意見を募っていることが挙げられる。具体的には以下のような形で実施された。

①グループディスカッション及びインタビュー（参加者 80 人以上）
②オンラインによるパブリックコメント（閲覧 3,000 件、コメント 100 件）
③アンケート調査（対象 500 人）
④意見交換会（参加者約 180 人）

数字だけ注目すると少ないようにも見えるが、第 1 章で述べたとおりシンガポールでは言論の自由が制限されているため、このように政府が国民の意見を積極的に聴取するのは貴重なケースである。

これらから得られた意見は計画作成に活かされ、実際に「公からの意見」として計画内にメッセージが引用されている。以下に一つ紹介する。

「Arts and culture should be a language, something you live with, like sport or yoga or jogging. If you don't do it, something is missing.」[19]

またこれまでの計画でも、あくまで経済成長の一翼を担うための創造力を有するという文脈で人材の育成には触れられてきたが、ACSR では人材育成の対象を「高齢者や外国人、アマチュア、趣味で楽しむ人」などに広げ、さらに経済戦略としてではなく国家帰属意識を育ませるために、全ての国民が芸術の観客、愛好家、専門家、教育者、支援者として芸術に触れることができる社会を目指している。こういった内容からも文化芸術を「アクセスしやすいもの（Our people will have easy access to a wide variety of arts and culture activities)」[20]とすることに重点を置いていることが分かる。どのようにして「アクセスしやすいもの」とするかについては、具体的に以下のような方針が示されている。

・年に一度の"Arts and Culture Day"の設定
・テレビやオンライン上の文化芸術コンテンツの強化
・市民施設等におけるコミュニティギャラリーの設置

ACSR では、これまでの計画と比較しても政策をはっきりと定義づけることが重要視され、次のとおり 2 つの大きな戦略とそれらに付随する各 3 つの小戦略が打ち出されている。

（1）大戦略 1　文化芸術を全ての人に全ての場所で毎日提供する

ア　小戦略①：文化芸術に関与する新しい「層」を獲得する

（具体例）

---

[18] 議長は School of the Arts（SOTA）の学長。
[19] THE REPORT OF THE ARTS AND CULTURE STRATEGIC REVIEW（2012）、PP.16
[20] THE REPORT OF THE ARTS AND CULTURE STRATEGIC REVIEW（2012）、PP.15

・学校におけるプログラムの質を高めるなど、次の世代の参加者を育てる
・文化芸術デーを作るなど、文化芸術を日常生活や余暇で楽しめるものとする
・情報を集約したポータルサイトを作り、新しい媒体での発信の場を作る

イ　小戦略②：文化芸術に生涯関わりを持てる仕組みづくり

（具体例）

・学校外で文化芸術を学習できる施設を作り、生徒が参加しやすい環境を作る
・人民協会（People's Association）のネットワークを活用して、退職後にも文化芸術に参加しやすい環境を作る
・国や企業が所有するスペースを開放し、文化芸術を趣味で楽しむ人が練習や公演、展示などをできるようにする

ウ　小戦略③：国家ムーブメントを引き起こす

（具体例）

・各地域で芸術に興味関心を持つ人同士が連絡を取れるクラブやコミュニティを作ったり、そういったコミュニティに関心のある人同士をつなげるファシリテーターを図書館に配置するなど、国内に文化芸術に熱心な人たちのネットワークを構築する

（２）大戦略２　優れたパフォーマンスを達成する能力の育成

ア　小戦略④：文化的な施設や企業などの組織体を通じて、芸術機運を醸成する

（具体例）

・シンガポール美術館の改装、エスプラネードシアターにおける中規模の公演会場の設置、アジア文明博物館のギャラリー改良など、国の主要な文化施設をより充実したものとする
・助成金や支援スキームを見直し、組織の具体的なニーズを満たすことができるものとする

イ　小戦略⑤：才能を育て、プロになることを支援する

（具体例）

・南洋美術専科学院（NAFA：Nanyang Academy of Fine Arts）やラサール芸術学校（LaSalle college of the Arts）のカリキュラムを改良するなどして若い才能を育てる
・会計や財務などの管理機能を担うプロ養成機関を作り、プロが目標に向かって活動できるような環境を作る

ウ　小戦略⑥：より高いパフォーマンスを目指し、仲間と協力する

（具体例）

・文化芸術を企業の CSR[21]に組み入れるなどして、企業によるスポンサー支援等に強いインセンティブを与える

[21] Corporate Social Responsibility の略。

【プラン期間中の主な実績】

◯2012 年：世界中からギャラリーを誘致し集積させたアート地区「ギルマンバラックス（Gillman Barracks)」の設置。

◯2013 年：シンガポール最大規模の芸術イベントである「シンガポール・アート・ウィーク（Singapore Art Week)」の第 1 回を開催。

◯2015 年：シンガポール国立博物館をリニューアルオープン。また、建国 50 年を記念し以下 2 つの大型美術館をオープンした。

① シンガポール最大規模の美術館である「ナショナルギャラリーシンガポール（National Gallery Singapore)」

② パリの私立美術館「ピナコテーク・ド・パリ」のアジア初の分館である「シンガポール・ピナコテーク・ド・パリ（Singapore Pinacotheque du Paris)」[22]

[22] 財政難や訪問客が予想より少なかった等の理由から、パリ本館と合わせてオープン後わずか 1 年で閉館となった。

第３章　行政機関

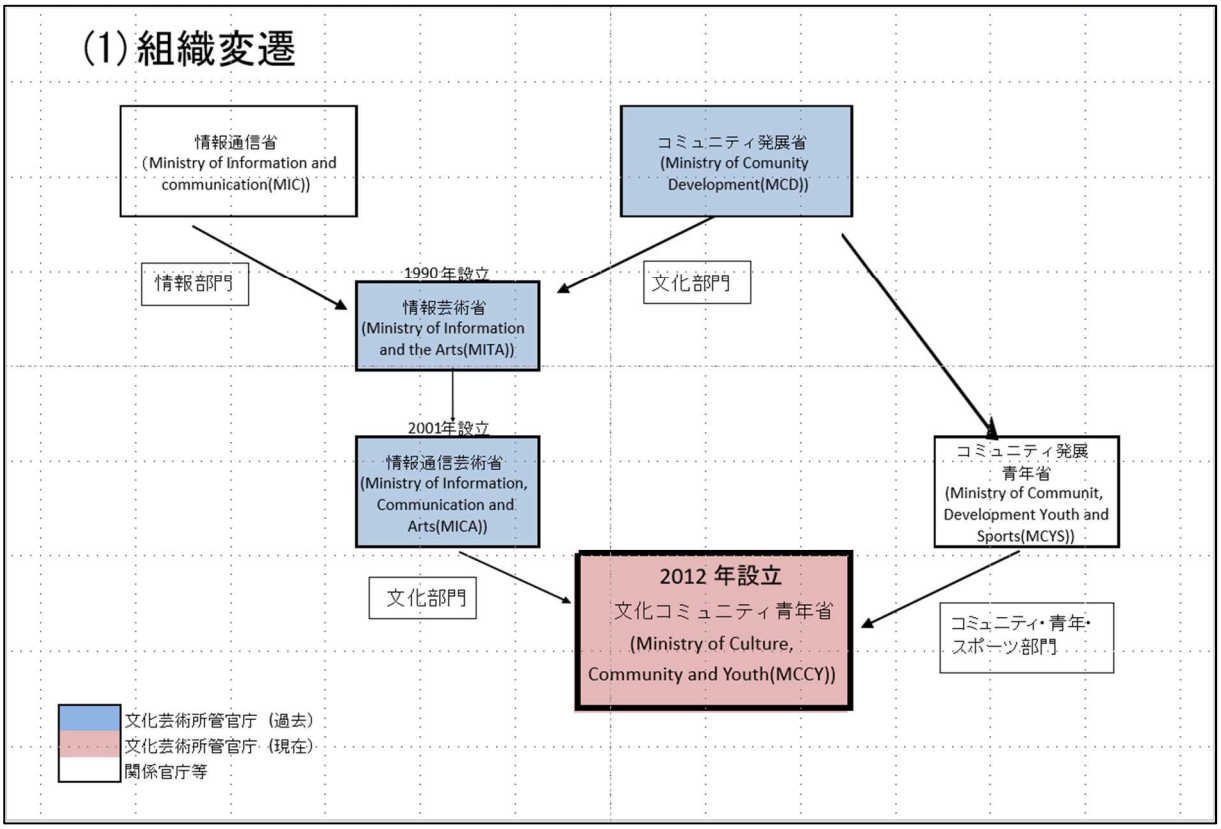
第１節　組織変遷

現在、文化芸術政策を所管するのは、文化コミュニティ青年省（MCCY : Ministry of Culture, Community and Youth）である。

過去何度か組織改正を経て、現在の形になっている。1990 年に情報通信省（MIC : Ministry of Information and Communication）の情報部門とコミュニティ発展省（MCD : Ministry of Community Development）の文化部門（Cultural Affairs Division）が合併し、情報芸術省（MITA : Ministry of Information and The Arts）が設立された。統合前は、MCD の文化部門が文化芸術政策を所管していた。

その後、放送公社（Singapore Broadcasting Authority）やインフォコム振興局（Infocom Development Authority）が加わり、2001 年に情報通信芸術省（MICA : Ministry of Information, Communication and Arts）へと改名された。

2012 年の「アート・アンド・カルチャー・ストラテジック・レビュー（ACSR）」の発表後に組織改編が行われ、現在の形となった。情報通信芸術省（MICA）の文化部門とコミュニティ発展ユース省（MCYS : Ministry of Community, Development Youth and Sports）のコミュニティ・青年・スポーツ部門が一緒になり、文化コミュニティ青年省（MCCY）が設立された。



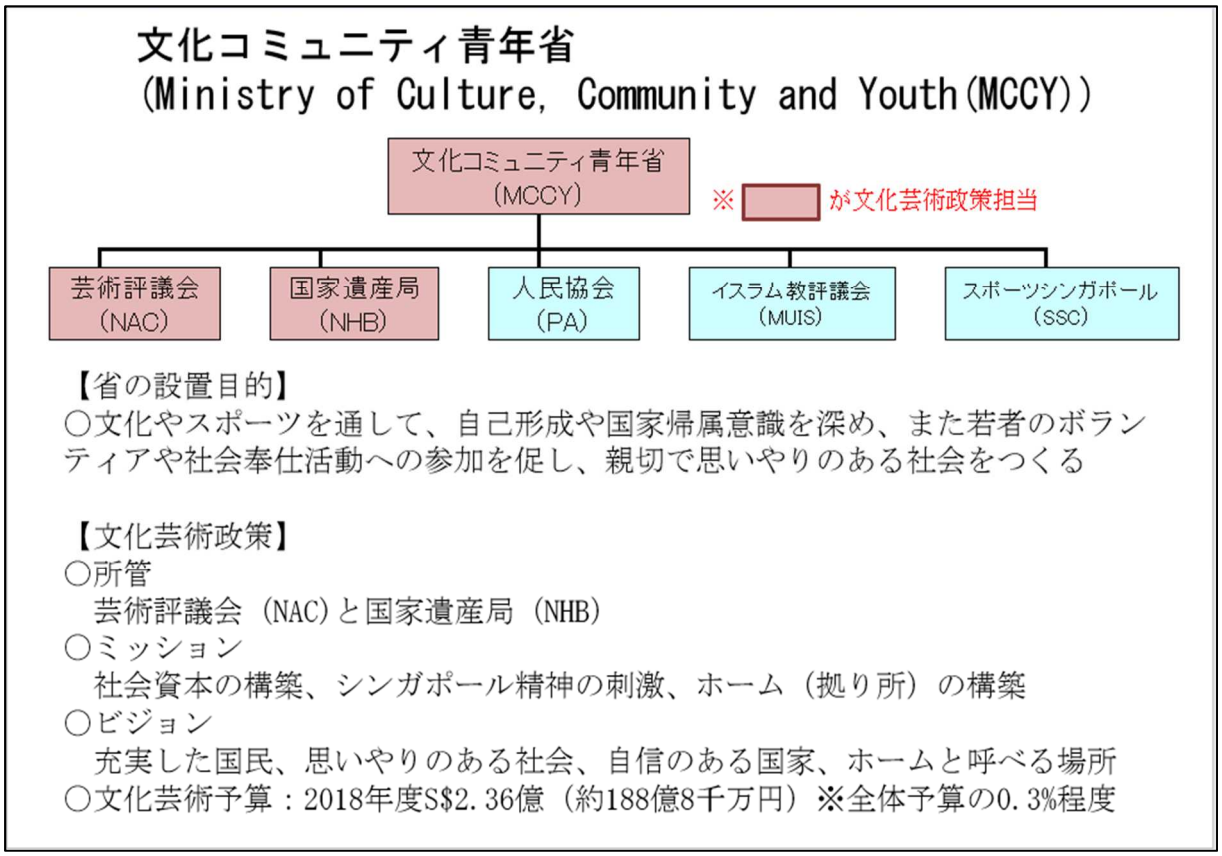
（出典：クレアシンガポール「シンガポールの政策　文化・芸術編」（2018））

第２節　文化コミュニティ青年省

１　概要

文化コミュニティ青年省（MCCY）は文化やスポーツを通して、自己形成や国家帰属意識を深め、また若者のボランティアや社会奉仕活動への参加を促し、親切で思いやりのある社会を作ることを目的としている。

下部組織には、情報通信芸術省（MICA）の下部組織であった芸術評議会（NAC）、国家遺産局（NHB）、コミュニティ発展青年省（MCYS）の下部組織であった人民協会（PA）、イスラム教評議会（MUIS：Majlis Ugama Islam Singapura / Islamic Religious Council of Singapore）、スポーツシンガポール（SSC：Singapore Sports Council）がある。その中で、文化芸術政策を担当するのは、NAC と NHB である。



（出典：クレアシンガポール「シンガポールの政策　文化・芸術編」（2018））

２　施策

ミッションは「社会資本を構築すること、シンガポールスピリットを刺激すること、ホーム（拠り所）を一緒に作ること（Building Social Capital, Inspiring the Singapore Spirit, Together Making Singapore Home）」である。またビジョンとしては、「シンガポールを充実した国民や思いやりのある社会とし、自信のある国家、ホームと呼べる場所とすること（to envision Singapore as A fulfilled and engaged people, A cohesive and caring society, A confident and resilient nation, The place we call

home)」である[23]。

2018 年度の予算は MCCY 全体予算が約 19.4 億ドル（約 1,552 億円）であり、うち全体の 6.3%に当たる 1.22 億ドル（約 98 億円）が NAC へ、全体の 5.9%に当たる 1.14 億ドル（約 91 億円）が NHB へ割り当てられている。NAC と NHB を合わせた文化芸術予算は 2.36 億ドル（約 188 億 8,000 万円）であり、2018 年度のシンガポール全体予算額約 800 億ドルの約 0.3%に相当する[24]。

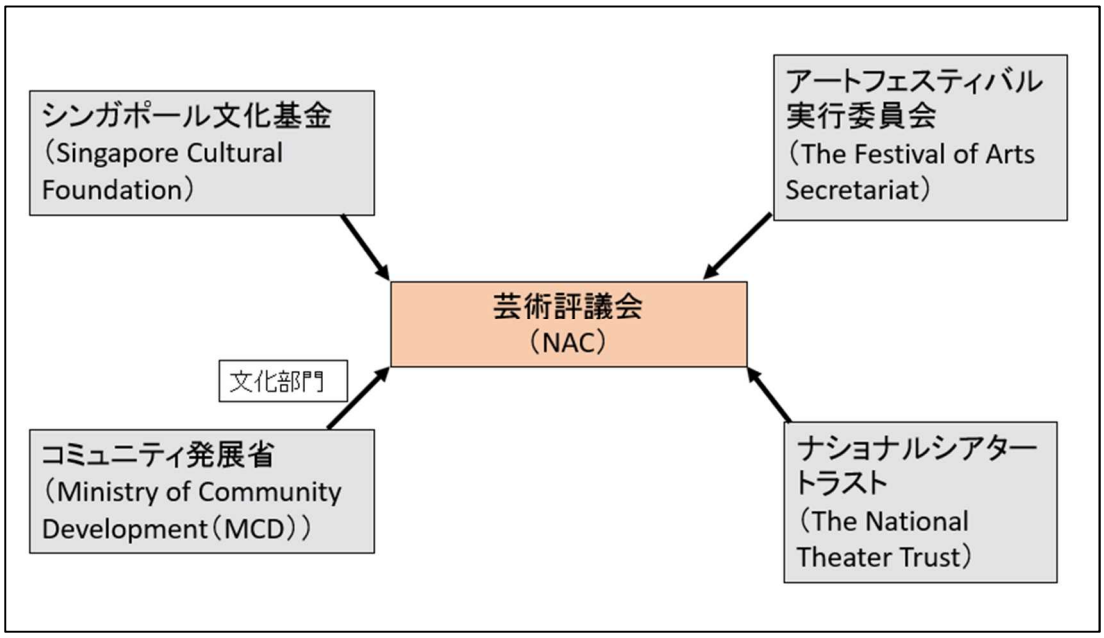
参考として、2018 年度の日本の文化庁予算は約 1,050 億円で、文部科学省予算約 5 兆円の 2.1%に当たる。また日本全体予算額約 97 兆円 4,500 億円の約 0.1%に相当する[25]。

第 3 節　芸術評議会（NAC：National Arts Council）

1　概要

1989 年に発表された「文化芸術に関する諮問委員会報告書」に基づき、イギリスのアーツカウンシルを手本に 1991 年に設立された。

当時文化芸術政策を扱っていた 4 つの機関、「シンガポール文化基金（Singapore Cultural Foundation)」、「コミュニティ発展省（MCD）の文化部門」、「アートフェスティバル実行委員会（The Festival of Arts Secretariat)」、「ナショナルシアタートラスト（The national Theater Trust)」が統合され、現在の組織になっている[26]。



（出典：NAC ホームページの情報を元に筆者作成）

[23] https://www.mccy.gov.sg/About-us.aspx（文化コミュニティ青年省ホームページ）
[24] Singapore Budget 2018（2018)、P.195
[25] http://www.mext.go.jp/a_menu/yosan/h30/1394803.htm（文科省予算ホームページ）
[26] https://www.nac.gov.sg/aboutus/milestone.html　（NAC ホームページ）

2　施策

ミッションは「生活に必要不可欠なものとして芸術を創造し、鑑賞する手助けをすること（To champion the creation and appreciation of the arts as an integral part of our lives)」である。ビジョンとしては、「人々に刺激を与え、地域社会をつなぎ、シンガポールをグローバルに位置付ける多様で特徴的な芸術の拠点となる（Home to diverse and distinctive arts which inspire our people, connect our communities and position Singapore globally)」である。[27]

主な政策の一つに芸術・文化振興のための助成金の交付がある。助成金をアーティストに交付するだけでなく、企業からもスポンサーシップを募っている。アーティスト活動をする場所のレンタル料の 90%を補助しているほか、調査・実験・ワークショップに係る費用やそれらに係る資材費等についても助成を行っている。

NAC は Goodman Art Centre という音楽スタジオや子どものためのアートスペースのほか、多目的に使用できる部屋が多数用意されている施設内にある。施設内には、文化・芸術関係企業、文化・芸術関係者、登録会員のほか一般の方も利用できる 30 の空き部屋やホールがあり、料金は 1 時間につき、企業は 50 ドル、芸術関係者は 25 ドル、登録会員は 15 ドル、その他一般利用者は 25 ドルである。

Goodman Art Centre の 1 時間あたりの利用料金	
企業	50 ドル
芸術関係者	25 ドル
登録会員	15 ドル
一般利用者	25 ドル

【Goodman Art Centre 外観】
（出典：筆者撮影）

【多目的スタジオが入っている棟】
（出典：筆者撮影）

また NAC は、アーティストに芸術作品の作成や保管ができる物件を提供し、地元住民にアーティストの活動を見てもらうことで芸術の素晴らしさをより身近に感じてもらう「アートハウジング事業」を行っている。

[27] https://www.nac.gov.sg/aboutus/mission-vision.html （NAC ホームページ）

アートハウジングの戸数は国内に 40～50 戸程度である。アートハウジングに住むアーティストが、障碍者や高齢者などのグループと関わって芸術の素晴らしさを伝えるほか、無料コンサートを実施したり、子どもたちと一緒にアートを作成したりといった取り組みを行っている。例えば、シンガポールの繁華街であるロバートソンキー（Robertson Quay）には「Theatreworks S」という多目的文化施設があり、小規模のサーカスや映画鑑賞会などの催しが定期的に開催されている。

【Theatreworks S 外観】（出典：筆者撮影）

そのほか、NAC は芸術イベントに若者の芸術家を積極的に参加させる機会を設け、熟練アーティストの仕事などを勉強させている。例えば、ユニクロや DBS 銀行[28]といった大企業と若いアーティストとが関わる機会を積極的に作るような取り組みを実施している。具体例として、NOISE SINGAPORE[29]という NAC 傘下の組織が、シンガポール建国 50 周年（SG50）の際には、ユニクロと提携してシンガポール人に愛される思い出となることをコンセプトに T シャツを作成する取り組みや、DBS Art Park でアートワークを実施するなどの取り組みを行った。

このように、住民、企業、後述する学校等一体となった文化・芸術振興を推進しており、文化芸術政策の実質的な行政窓口機関である。

第 4 節　国家遺産局（NHB：National Heritage Board）

1　概要

NAC 同様、1989 年の「文化芸術に関する諮問委員会報告書」に基づき、1993 年に設立された。NHB はシンガポールの遺産管理人として、歴史を語り、経験を共有し、シンガポールの意志を伝える責任を持ち、シンガポール国内の美術館、博物館の管理・運営を行っている。

---

[28] シンガポールの地場大手銀行である The Development Bank of Singapore の略称

[29] https://www.noisesingapore.com/About-Noise
https://www.noisesingapore.com/Programmes/Partnerships
（NOISE SINGAPORE ホームページ）

2　施策

ミッションは「共有の遺産を守り、称える（To preserve and celebrate our shared heritage）」。NHB は教育、国家づくり、文化的理解のために多様なコミュニティの遺産を守り、促進する役割を担っている。ビジョンは「過去に誇りを持ち、未来のために遺産を残す（Pride in our Past, Legacy for our Future）」。[30]シンガポール人は歴史を理解し、遺産を未来へ残すことを大切にするという考え方である。

所管している施設に、アジア文明博物館、インドヘリテージセンター、マレーヘリテージセンター、シンガポール国立博物館、プラナカン美術館、切手博物館、孫中山南洋記念館、ブキ・チャンドゥ回想館がある。

[30]https://www.nhb.gov.sg/who-we-are/about-us/mission-and-vision（NHB ホームページ）

第４章　文化芸術教育

第１節　中等教育～前高等教育（secondary school～junior college）

先のルネッサンス・シティ・プランでも述べたとおり、文化芸術政策の中で人的資源の開発にも重点が置かれ、教育現場においても文化芸術分野への取り組みが広がっていった経緯がある。

中等・前高等教育については、2008 年に芸術を専門とする「SOTA：School of the Arts」が開校したことが大きく、これは 1990 年代からの教育改革[31]に伴う文化芸術教育の位置付けの変化を物語るものである。この学校の設立の背景には、専ら経済戦略的な文脈としての芸術振興政策における創造力を持った人的資源の開発の側面と、多様性と柔軟性を標榜する教育改革における新しい芸術教育の試みという側面があった。SOTA における教育は、狭い専門領域に特化するのではなく、幅広い芸術に触れさせるとともに、自然科学や社会科学などの学術領域を統合させた総合的な芸術教育を志向している。芸術振興政策と教育政策の双方の要求を満たしつつ、高い次元でこれまでにない新しい芸術教育、新しい中等教育段階を実践している成功例といえる。[32]

SOTA はシンガポール初の中等～前高等芸術専門学校である。13～18 歳が対象で、一学年 200 人、全校で 1,200 人の生徒が通う。期間としては、シンガポールにおける小学校卒業後から大学入学までに通う中等学校（secondary school）（４～５年）と、大学準備教育機関（junior college）（２年）に相当する。

入学試験は中等学校に進学する場合と同様、全国統一初等学校修了試験（PSLE：Primary School Leaving Examination）[33]に加え、芸術に関する試験がある。PSLE だけの試験と比べると、生徒は自分の得意分野である芸術を武器にすることができるといえる。

卒業時には、シンガポールの大学へ進学する際に必要なシンガポール・ケンブリッジ上級教育認定試験（GCR-A レベル）[34]と同等の国際バカロレアディプロマ[35]が得られ、国内だけでなく海外の大学へ進学する選択肢も得られる。

カリキュラムは文学や言語、社会科学、自然科学、数学などの学術分野の科目に加えて、視覚芸術（絵画・彫刻など）、音楽、演劇、舞踊などの専門コースがある。

参考として、学費（月間）は次表のとおりである[36]。シンガポール国民が優遇されていることが分かる。

---

[31] クレアレポート No.420「シンガポールの教育制度改革について」を参照
[32] 佐々木宰ほか、2014、『シンガポールの芸術振興政策と芸術教育：School of the Arts Singapore の事例』、PP.78-86
[33] クレアレポート No.416「シンガポールの英語教育について」を参照
[34] Singapore Cambridge General Certificate of Examination, Advanced Level の略
[35] International Baccalaureate diploma examination の略
[36] https://www.sota.edu.sg/admissions/school-fees（SOTA ホームページ）

SOTA の学費（月額）			
シンガポール国民	シンガポール 永住権者	外国人 （ASEAN）	外国人 （ASEAN 以外）
350 ドル （約２万８千円）	695 ドル （約５万５千円）	2,200 ドル （約 17 万６千円）	2,650 ドル （約 21 万２千円）

（出典：SOTA ホームページの情報を元に筆者作成）

第２節　高等教育（University）

高等教育においては、従来から教育機会の提供がなされてきた。それは、1938 年には既に南洋美術専科学院（Nanyang Academy of Fine Arts）というカレッジレベルの芸術学校が設立されていたことからも分かる。

現在シンガポール国内では以下の４校が芸術分野の高等教育を提供している。どれも建物のデザインが奇抜であることが特徴である。

① 南洋美術専科学院（NAFA：Nanyang Academy of Fine Arts）[37]

1938 年に設立された。現在は民間により運営されているが、政府からの補助金も得ている。卒業時には、ディプロマ、学位が得られる。3D デザイン、芸術管理、デザインとメディア、美術、ファッション、ダンス、音楽、演劇のコースがある。

② ラサール芸術学校（LaSalle college of the Arts）[38]

NAFA の次に歴史を持つ芸術学校。非営利団体により運営されている、1985 年に設立された芸術学校である。卒業時には、ディプロマ、学位、修士号が得られる。美術、映画とアニメ、クリエイティブ産業デザイン、デザインコミュニケーション、ファッション、空間デザイン、現代音楽、ダンスと演劇の８つの学部が用意されている。

③ シンガポール国立大学（NUS）

2001 年に「ヨンシュートー音楽学科（Yong Siew Toh Conservatory of Music）」[39]が設立された。シンガポールで初めて、音楽の学士と修士号を得られる全日制課程である。全生徒に奨学金が与えられるが、現在のところ入学はシンガポール人に限られている。オーケストラ楽器やピアノ、作曲といった学科が用意されている。

④ 南洋工科大学（NTU：Nanyang Technological University）

2005 年に「芸術デザイン及びメディア学部（School of Art Design and Media）[40]が作られた。美術分野の学位を得られる４年生の学部が用意されている。

---

[37] http://www.nafa.edu.sg/（NAFA ホームページ）
[38] http://www.lasalle.edu.sg/（ラサール芸術学校ホームページ）
[39] https://www.ystmusic.nus.edu.sg/（NUS ホームページ）
[40] http://www.adm.ntu.edu.sg/Pages/index.aspx（NTU ホームページ）

南洋美術専科学院
(Nanyang Academy of Fine Arts)

ラサール芸術学校
(LaSalle college of the Arts)

（出典：各教育機関ホームページ）

シンガポール国立大学（NUS)
(Yong Siew Toh Conservatory of Music)

南洋工科大学（NTU)
(School of Art Design and Media)

第５章　文化芸術事例

第１節　日本とシンガポールの文化芸術施設の比較

	日本	シンガポール
運営方法	国立（独立行政法人） 県立や市立（自治体） 私立（個人、企業）	国立（国家遺産局(NHB)ほか） 私立（個人、企業）
価格設定 （区分の一例）	・一般/大学生 ・個人/団体 ※高校生以下、65歳以上、心身に障害のある者は無料の施設が多い	・シンガポール国籍保有者や永住者/それ以外 ・一般/中学生以下や60歳以上、心身に障害のある者 ※シンガポール国籍保有者や学生、教師は無料の施設もある
価格帯 一般価格 （常設展示）	500円～1,300円程度	S$6～S$20程度 （約500円～1,700円）
展示方法	【鑑賞型展示に重点】 ・一部携帯電話の使用や私語、模写等が禁止されている	【体験型展示に重点】 ・デジタルオーディオ（説明ガイド）取得に携帯電話の活用も ・子供への教育を意識した内容

（出典：クレアシンガポール「シンガポールの政策　文化・芸術編」（2018））

まず運営主体について、日本では国立美術館は文化庁所管の独立行政法人が、県立や市立美術館はそれぞれの自治体が、私立美術館は企業や個人が運営をしている。一方シンガポールでは、国立美術館（基本的に企業や個人による美術館以外のもの全般）は芸術評議会（NAC）又は国家遺産局（NHB）から出資や助成を受ける団体が運営を行う。また、アートサイエンスミュージアム（Art Science Museum）など一部の企業や個人の運営による美術館もある。

料金設定については明確な違いがある。日本では一般と学生が大きな区分であるのに対して、シンガポールではシンガポール国籍保有者及び永住者か外国人かという大きな区分があり、それに加えて、一般と学生という区分がある。一定年齢以下の学生が無料であることが多いのは日本と共通である。価格帯に関しては、一般価格は日本もシンガポールも同程度であるが、シンガポールの美術館ではシンガポール国籍保有者及び永住者に対してはさらに安く価格が設定されているほか、無料のところもある。

展示方法については、日本の美術館は「鑑賞」に重点が置かれているのに対して、シンガポールでは「体験・学習」に重点が置かれている点が異なる。日本の美術館は携帯電話の使用を禁じているところも多いが、シンガポールでは携帯電話を使って説明ガイドが取得できるほか、展示内容に関するクイズの提供など、訪問者が実際に参加したり、子どもが楽しんで学習できるような工夫がなされている。芸術に深い造詣がない方にも可能な限り作品のテーマや魅力などが伝わるように配慮されているといえ、

日本にとって参考になるのではなかろうか。

また公用語４言語[41]に加え、日本語、韓国語など多言語のパンフレットや多言語による有料・無料のガイドツアーが用意されているのが一般的である。

第２節　文化芸術施設

１　シンガポール国立博物館（National Museum of Singapore）[42]

シンガポール国立博物館は、1887 年にオープンした、シンガポールで最も古く最大規模の博物館である。最初は学校の図書館の一部としてスタートしたが、1887 年に博物館となり、シンガポールが独立した年である 1965 年からは歴史に重点を置いた博物館として、現在の名前が付けられるようになった。

シンガポールの歴史については、「シンガポール歴史ギャラリー（Singapore History gallery）」というコーナーに詳しく展示されている。シンガプーラ（Singapura）時代（1299～1818 年）、植民地時代（1819～1941 年）、昭南島時代（1942～1945 年）、シンガポール（Singapore）時代（1945 年～現在）の４つにエリアが分かれている。昭南島時代については、シンガポール人が日本軍の占領下でどう生活をしていたのか、「サバイビング昭南（Surviving Syonan）」という別の展示室でも詳しく説明がなされている。

そのほか、シンガポールの創設者であるトマス・ラッフルズの命令で実質シンガポールを統治していたウィリアム・ファーカーが、当時生息していた動植物を記録として絵師に描かせたものが「ウィリアムファーカーコレクション（William Farquhar Collection）」として記録に残っており、貴重な資料として展示されている。また、2016 年には、日本のデジタルアート集団である「チームラボ（teamLab）」[43]がこのコレクションを題材として、常設展示「Story of the Forest」[44]を開催した。デジタル空間でコレクションの動植物を鑑賞することができ、専用のアプリをダウンロードすれば、その動植物の詳細を確かめることもできる。芸術と教育がうまく融合した展示であったといえる。これはシンガポール政府がチームラボに直接依頼して実現したものである。

なお、シンガポールの多くの美術館でチームラボの展示が行われている。これは 2012 年にチームラボが独自に開催した展覧会を当時のシンガポールビエンナーレのディレクターが気に入り、2013 年のシンガポールビエンナーレ[45]にチームラボが参加したことから、シンガポール政府とチームラボの交友が始まったことによるものである。

これらのほか、最近では建築物の外壁を活かしたプロジェクションマッピングがよ

---

41 英語、中国語、マレー語、タミル語

42 HP http://nationalmuseum.sg/（シンガポール国立博物館ホームページ）

43 https://www.teamlab.art/jp/w/story-of-the-forest/（チームラボホームページ）

44 https://www.artlogue.org/morisako-story-of-the-forest/
（ARTLOGUE ホームページ）

45 本稿 P.29 参照

く行われている。これは各民族の母国をイメージしたコンセプトが基調となっており、多民族理解・融和に大いに貢献していると言えるだろう。

【ナショナルミュージアム外観】

【館内展示の様子】

（出典：筆者撮影）

2　ナショナルギャラリーシンガポール（National Gallery Singapore）[46]

ナショナルギャラリーシンガポールは、2015 年に旧市庁舎や旧裁判所を改築して作られた世界最大級の美術館であり、シンガポールをはじめ珍しい東南アジアの現代美術が中心に集められている。絵画、彫刻、映像など８千点以上のコレクションを有する。本項では当美術館の特徴を５つ紹介したい。

まず１つ目は、旧市庁舎や旧裁判所といった歴史的に重要な建物をうまく改築し、訪問者が内装も楽しむことができるようになっている点である。

次に、福岡アジア美術館、東京国立近代美術館、ポンピドゥー・センター（フランス）、オルセー美術館（フランス）、熱帯博物館（オランダ）、国立ベトナム歴史博物館（ベトナム）の６館がオフィシャルパートナーとして名を連ねている。これにより、お互いの所蔵する美術品の展覧会の開催などの相互交流が行われており、関係国との文化交流に大きく貢献している。

続いて、子供が楽しんで訪れ、創造的な発想力を育成できるようなプログラムを用意している。例えば 2017 年から始まった「ギャラリーチルドレンビエンナーレ」では、ワークショップや体験型アートを提供している。また、「Keppel centre for art education」という常設の部屋では子どもが絵描きを楽しむことができる。子ども同士が同じ空間で同じ作業に取り組むことで国民としての共通意識を育むことができれば、シンガポールが望む国民アイデンティティの確立に一歩近づくことができるかもしれない。

４点目は、マリーナベイサンズを含む周辺の絶景を眺められる屋上庭園が開放されている他、人気のあるレストランが多数集まっているなど、展示以外でも訪問者が楽しめる場所となっていることである。

最後に、シンガポール国立博物館と同様、近年では建築物の外壁を活かしたプロジ

[46] https://www.nationalgallery.sg/（ナショナルギャラリーホームページ）

ェクションマッピングがよく行われていることが特徴である。

そのほか、過去の展示内容として、2017 年 6 月から 9 月にかけて日本人アーティストの草間彌生氏の企画展「Life is the heart of a rainbow」が開催された。この展示会では写真撮影が許可されており、訪問者が展示会の様子を SNS に投稿するなどして人気を集めた。初めての日本人アーティストの企画展であったが、同施設で過去最大の動員数を記録した。

さらに、2017 年 5 月から 10 月にかけて、チームラボによるデジタルアート作品「世界は均質化されつつ、変容し続ける」が展示された。空間に大きな球体をたくさん浮遊させ、人が触れると球体全ての色が変わるといった体験型アートの作品内容であった。また、チームラボは 2018 年 1 月から 8 月にかけて同じくデジタルアート作品である「Walk, Walk, Walk：Search, Deviate, Reunite」と「花と人 - Dark」の作品を展示している。

【ナショナルギャラリー外観】

（出典：筆者撮影）

3　シンガポール美術館（Singapore Art Museum）[47]

シンガポール美術館は 1996 年にオープンした、シンガポール初の美術館である。ミッションスクールを改築して建てられたもので非常に美しく、東南アジアの現代アートや絵画、彫刻などの現代美術が集まっている。

同美術館ではシンガポールビエンナーレ[48]を主催しており、毎回メイン会場となっている。

【シンガポール美術館外観】

（出典：筆者撮影）

[47] https://www.singaporeartmuseum.sg/（シンガポール美術館ホームページ）
[48] 本稿 P.29 参照

4　アートサイエンスミュージアム（Art Science Museum）[49]

シンガポールで人気の観光地の一つでもあるのが、2011 年にオープンしたアートサイエンスミュージアムである。蓮の花のような形が特徴で、マリーナベイサンズを運営しているラスベガス・サンズ社により運営されており、同敷地内にある。

チームラボによる体験型の展示「Future World」が 2016 年３月から常設展として続いており、人気を博している。壁に投影された魚のホログラムを触ると動いたり別の動物に変化したりするなど、能動的に楽しむことができる空間であり、また常設展でありながら定期的に新しい作品が追加されたりと飽きさせない工夫がなされている。2018 年６月には「自然」「街」「公園」「宇宙」の４つのテーマがあり、それぞれのテーマに合わせ、複数の空間に分けた展示を行った。例えば「自然」をテーマにしたゾーンでは、暗い部屋の中で光で表現したカラスが飛び回る様子を描きだした空間、同じく暗い部屋の中でデジタル技術で再現した波の動きを表現した空間、果実や花が投影された滑り台を滑ると滑った跡が光の道となって表れる空間、といったように、３つの部屋に分かれて展示が行われた。

またこの美術館では、シンガポールでは珍しく国際巡回展示が行われ、これまでにゴッホ展やダ・ヴィンチ展、ポップアートで有名なアンディ・ウォーホル展などが行われている。

そのほかにも、ビッグデータ[50]、素粒子物理学、古生物学、宇宙探査、遺伝子工学などの科学的展覧会も開催されている。

【アートサイエンスミュージアム外観】

（出典：筆者撮影）

5　エスプラネードシアター（Esplanade Theater）[51]

エスプラネードシアターは 2002 年にオープンした総合文化芸術施設であり、２つの大きなコンサートホールとシアター、４つのスタジオ、屋外シアター、図書館、屋上開放エリアなどから成る。そのほか、レストランやショッピングモールも併設されてい

---

[49] http://www.marinabaysands.com/museum.html#pdApkyiUzuep61H3.97（アートサイエンスミュージアムホームページ）

[50] 典型的なデータベースソフトウェアが把握、蓄積、運用、分析できる能力を超えたサイズのデータ。近年ではビッグデータを活用して社会・経済の問題解決や、業務の付加価値向上あるいは支援を行うビジネスも生まれている。

[51] https://www.esplanade.com/（エスプラネードホームページ）

る。また、シアター内のフリースペースや最寄りの駅に直結した地下道もアートスペースとして活用されている。直射日光を避けるため、ドームの屋根には多数の突起が取り付けられており、その形状から通称「ドリアンドーム」とも呼ばれている。公益法人であるエスプラネード社により運営されており[52]、同社はシンガポール政府から援助を受けている。2017 年度の助成額は 6,070 万ドル（約 48 億 5,608 万円）。

音楽やバレエ、演劇などが行われる他、無料で楽しめる野外劇場や芸を披露できるスペースがあり、プロだけでなくアマチュアや住民にとって気軽に文化芸術に触れられる場所となっている。また、多民族参加型の場と機会を提供しているともいえる。

メインであるコンサートホールには 1,827 の座席があり、オーケストラコンサート、セミナーや会議、授賞式などが行われている。もう一つのメイン会場であるシアターには 1,950 の座席があり、音楽演奏やオペラ、ダンス公演、劇、映画上映、セミナーや会議、授賞式などが行われる。

特徴の一つとして、プロだけでなく、新しい才能の発見・育成の取り組みとして、アマチュアへの公演の機会を与えていることが挙げられる。シアター内のフリースペースでは無料で公演を行うことができる。これは才能の発掘だけでなく、異文化に触れ理解する機会が増えることにもつながる。このようにシンガポールの文化芸術政策は一つの取り組みが多文化共生につながりうるものとして興味深い。

もう一つの特徴は、お金を払わなくても楽しむことができるプログラムが用意されており、シンガポール人や観光客が文化芸術に触れる機会を多く提供していることである。屋外のシアターやフリースペースでは日々様々な公演が行われているが、無料で気軽に楽しむことができる。

完成した 2002 年から 2017 年までの 15 年間で 37,000 の公演が催され、2,600 万人が出演した。今後は 550 の座席を持つ中規模会場のウォーターフロントと呼ばれる新しい建物が建築される予定である。2019 年から着工され、2021 年完成予定である。

【エスプラネードシアター外観】
（出典：筆者撮影）

6　プラナカン博物館（Peranakan Museum）[53]

[52] エスプラネード社の主務官庁は文化コミュニティ青年省（MCCY）。
[53] http://peranakanmuseum.org.sg/（プラナカン博物館ホームページ）

シンガポールの伝統文化を知るための博物館として、プラナカン[54]博物館がある。1912 年にオープンし、戦争を挟みながら何度か場所を移転し、1982 年から現在の場所に位置している。

プラナカン博物館は過去に学校として使われていた建物を使っており、プラナカンの人々が使用する宝飾品、家具、食器、洋服、工芸品（刺繍品）などが展示されている。また、結婚や葬式などに関する説明を聞くことが可能で、プラナカン文化をより深く知ることができる。

【プラナカン博物館外観】

（出典：筆者撮影）

7　アートハウス（The Arts House at the Old Parliament）

アートハウスは 2004 年に建設された、絵画の展示、映画や劇の上演を行う施設である。かつて国会議事堂として使われていた歴史ある白亜の建物を活かし、内装もそのままとなっている。建物の一部は有料で芸術団体に貸し出しており、ワークショップなども開催されている。ラッフルズの上陸地点が近くにあり、レプリカ像が建てられている。

【アートハウス外観】

（出典：筆者撮影）

8　ギルマンバラックス（Gillman Barracks）

ギルマンバラックスは 2012 年に誕生した新しいアート地区である。シンガポールの

[54] 数世紀前に東南アジアの女性と結婚した外国貿易商人の子孫。マレー語で「この地で生まれた」という意味。シンガポールのプラナカンコミュニティの大半を占めているのは、中国系プラナカン（19 世紀にペナンやシンガポールなど活況だった港に定住した中国人貿易商人の子孫）である。

西部にあり、かつてイギリス軍の宿舎として使われていたコロニアル様式の白亜の建物を改築してオープンした。シンガポール経済開発庁（EDB : Economic Development Board）、芸術評議会（NAC）、JTC コーポレーション（商業地区の開発管理を行う法定機関）が共同で約 1,000 万ドル（約８億円）の予算をかけたプロジェクトである。アジアを中心に世界各国から現代美術を扱うギャラリーを誘致し、６．４ヘクタールの広大な敷地に 13 のギャラリーが集まる。日本からは「オオタファインアーツ」、「ミズマアートギャラリー」、「小山登美夫ギャラリー」の３ギャラリーが参加した。シンガポールアートウィークの会場でもある。

【ギルマンバラックス外観】

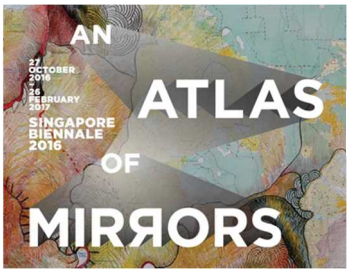
（出典：筆者撮影）

第３節　文化芸術イベント

１　シンガポールビエンナーレ（Singapore Biennale）

シンガポールビエンナーレは、2006 年から始まった現代美術展示会である。現在は概ね隔年で開催されている。直近では 2016 年 10 月から 2017 年２月に「アトラスオブミラーズ、地図と鏡（Atlas of Mirrors）」をテーマに、東南アジアや南アジア、東アジアから集められた作品が展示された。主催は開催年によって異なるが、シンガポール美術館が主催することが多く、展示品数はシンガポール美術館が最も多い。そのほか、シンガポール国立博物館やプラナカン美術館、アジア文明博物館などでも開催される。

2016 年 10 月から 2017 年２月まで開催された第５回目は 60 以上のアーティストが参加し、日本人アーティストも３人参加している。



【アトラスオブミラーズのポスター】

（出典：SINGAPORE BIENNALE ホームページ）

２　シンガポールライターズフェスティバル（Singapore Writers Festival）

シンガポールライターズフェスティバルは、毎年開催されている国際的な文学イベ

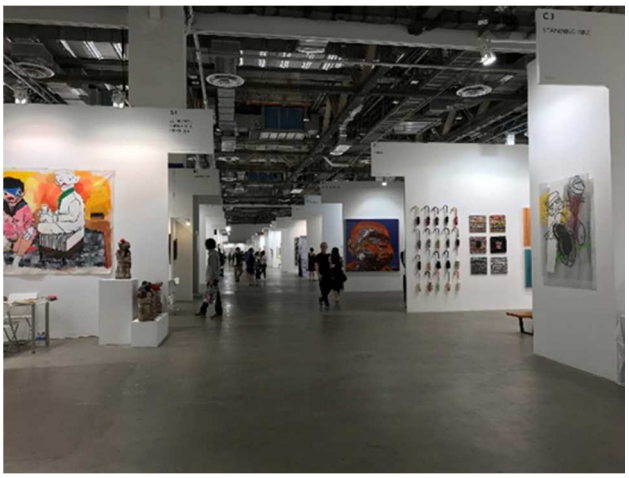
ントである。1986 年から隔年で開催されていたが、2011 年からは毎年開催されている。直近では 2018 年 11 月に開催された。内容としては、国際的に著名な作家や出版社などを世界中から集め、パネルディスカッションやワークショップなどを開催しながら作品を紹介するものである。参加者はシンガポールの作家のほか、アメリカ、イギリス、オーストラリア、インドネシア、マレーシアなど多彩な国々から参加しており、日本からは青山剛昌氏（「名探偵コナン」の作者）、綿矢りさ氏（「蹴りたい背中」の作者）が参加した実績がある。

メイン会場はアートハウスであり、そのほかナショナルギャラリーやアジア文明博物館でも開催されたことがある。

3　アートステージ・シンガポール（Art Stage Singapore）

アートステージ・シンガポールは、2010 年から始まったアジア最大級の美術展覧会である。マリーナベイサンズで開催され、世界中のギャラリーからアジアのアーティストの作品を中心に出展・売買が行われる。また、展示に加え、アーティストやコレクターによるトークイベントも開催されている。日本、アメリカ、中国、イギリス、オーストラリア、マレーシア、インドネシア、韓国、タイなど世界中のギャラリーが参加しているイベントである。

直近では第 8 回目が 2018 年の 1 月に開催され、82 のギャラリーが参加した。



【展示会の様子】

（出典：筆者撮影）

4　シンガポールアートウィーク（Singapore Art Week）

シンガポールアートウィークは 2013 年から開催されている芸術イベントである。直近では第 6 回が 2019 年 1 月に開催され、100 以上のイベントが行われた。ナショナルギャラリー、アートハウス、エスプラネード、シンガポール美術館、ギルマンバラックス、アートサイエンスミュージアムなどで展示やワークショップ、パフォーマンス、トークイベントなどが開催される。また近年はリトルインディアやジュロンイースト、ロバートソンキーなどの街中において展示やワークショップが開催されている。アー

トステージ・シンガポールもこの時期に合わせて開催されるものである。また、ナショナルギャラリーで開催される「Light to Night Festival」やギルマンバラックスで開催される「Art After Dark」など、外壁を利用したプロジェクションマッピングの人気も高い。

【イベント期間中の様子】

（出典：筆者撮影）

第６章　文化芸術政策の各指標にみる成果

文化芸術政策の遷移に伴い、シンガポール国内における展覧会の開催日数や入場者数等は下表のように推移している[55]。

指標	1996 年	2005 年	2015 年
公演と展覧会の開催日数	6,000 日	19,000 日	26,000 日
有料公演や展覧会への入場者数	75 万人	126 万人	195 万人
無料公演や展覧会への入場者数	99 万人[56]	221 万人	278 万人
経済効果	５億６千万ドル（約 431 億円）	９億７千万ドル（約 640 億円）	17 億ドル（約 1,500 億円）
芸術関係企業や組織の数	400 社	650 社	6,200 社
従業者数（文化芸術業界）	16,000 人	21,000 人	27,000 人

（出典:クレアシンガポール「シンガポールの政策　文化・芸術編」(2018)）

まず、公演と展覧会の開催日数については 1996 年から 2015 年の 10 年で約３．１倍に増えている。これは 1996 年のシンガポール美術館の完成、2002 年のエスプラネードシアターのオープンなどが要因として考えられる。

次に有料公演や展覧会への入場者数については 1996 年から 2015 年で約２．６倍、同様に無料公演や展覧会への入場者数については約２．８倍に増えている。観光客数の増加や、エスプラネードシアターやコミュニティセンターなどにおける無料プログラムの充実などが要因として挙げられる。

経済効果については、1996 年は５億６千万ドル（当時のレート（１ドル＝77 円）で約 431 億円)、2005 年は９億７千万ドル（当時のレート（１ドル＝66 円）で約 640 億円、2015 年は 17 億ドル（当時のレート（１ドル＝88 円）で約 1,500 億円）となっており、この 20 年間で約３．４倍（円ベース換算）となっている。

芸術関係企業や組織の数については、カウントする企業の定義が年によって異なるため過去との単純比較はできないが、助成金の整備などにより 2015 年現在は 6,200 社となっている。また文化芸術業界の従業者数についてはこの間に約１．７倍となっている。

また、文化芸術政策の重要な柱となっている、アイデンティティの構築についてはどのような成果が出ているであろう。結論から言うと、シンガポール国民のアイデンティティは国民自身によって今後も模索が続けられるものであると考えられる。例えばシンガポールには国民が生活するための公団住宅があるが、それぞれの公団住宅で同一の民族が固まりすぎないよう、人種構成比率が規定されている。これは民族の垣根を越えて、同じシンガポール人であるという意識を国民に持たせるためである。その他、本稿で触れてきたように、文化芸術を通してシンガポール人のシンガポール帰属意識の確立が掲げられている。これらの他にも民族融和政策は実施されているが、

[55] Singapore Cultural Statistics（2016）に掲載の数値を使用
[56] 統計を取り始めた 2003 年の数値

上述のとおり多様な民族、歴史、文化、言語を持つ国民が暮らすシンガポールにおいて、「国民」としてのアイデンティティの確立は容易ではない。政府から、国民としてのアイデンティティを構築するために与えられたこれらの民族融和のための政策を通して、国民自身がそのアイデンティティを見つけ出していく必要があり、施設やイベントが充実してきた昨今、まさに今そのフェイズに入っているといえるだろう。

これまでのシンガポールの取り組みを通して、多文化共生に今後ますます取り組む必要がある日本においてどのような点が参考になると思われるか、以下に記載する。

まず一般論的に、文化芸術を活用した共感、共創活動が挙げられる。例えばアートサイエンスミュージアムの子ども向けのワークショップなどにおいて、一体感、相互理解、助け合いなどの意識が育まれることが期待される。ひいては家族・親同士の交流、さらに地域での交流につながることも期待される。

次に、アート・アンド・カルチャー・ストラテジック・レビュー（ACSR）の戦略に挙げられていたように、文化施設を活用したコミュニティ活動を通して、地域独自のアイデンティティの形成を図ることも可能である。多民族が共生する地域においても、文化芸術を通すことで住民全員としてもアイデンティティを確立しやすくなるのではないか。

また、エスプラネードシアターでの例のように、文化芸術イベントやワークショップ等を通じて様々な国の文化芸術に接する場を提供することでも、コミュニティ内での相互理解と共感を呼び起こしやすいだろう。これにより同一民族単位での交流や、言語の壁を超えた感動体験を創出することが期待される。

まとめると、「地域」と「アート」とを結び付けた「交流」やその連動は、その地域に住む人の郷土愛の共有を引き起こす効果も期待されるのではないだろうか。

おわりに

本稿においては、シンガポールの文化芸術政策の内容を、政策や行政組織の変遷、文化芸術教育、施設やイベントの事例などを通して論じてきた。シンガポールの文化芸術政策の特徴は、独立当初の経済発展に資する一つの経済戦略的要素であったものが、国民のアイデンティティを確立するための精神的インフラへの構築へとその有様を変えてきたことである。

文化芸術を経済成長から文化的な人づくりに資するものとして捉えた、政策の転換点として重要な「アート＆カルチャー・ストラテジック・レビュー（ACSR)」においては、全ての国民が文化芸術に触れられる機会を提供する方針が提唱され、芸術評議会が行っている「アートハウジング事業」などで実際に政策を実現するための取り組みが実施されている。

アートハウジング事業のみならず、国民が文化芸術に触れる機会は実際に多いといえる。特にエスプラネードシアターの屋外ステージで催される無料公演が非常に素晴らしい例であると考える。無料とはいえ非常にレベルの高い公演が多く、筆者は音楽を多少嗜むが、音響設備等も非常に素晴らしいものが使用されている。公演時はほとんど満席に近いことが多いが、このような質の良い芸術環境に日ごろから触れられることで、間違いなく国民の文化芸術の感覚や水準は高まるであろう。

人材育成の観点においては、中・高一貫で芸術に特化した教育を提供する「School of the Arts（SOTA)」等について述べたが、1990 年代後半からのシンガポールの教育改革における芸術教育には、ビジネス革新を起こす知識性、創造性の開発という役割が少なからず求められていた。この点においては、経済成長の柱としての教育政策に芸術が収斂されているという見方もできなくはない。ただ、SOTA の教育コンセプトは教養をベースにした総合的な芸術教育を求めるものであり、新しい芸術教育を実践している点で、シンガポールの教育政策と芸術振興政策双方の要求を満たした成功例といえるだろう。

ACSR で大々的に掲げられたシンガポールのアイデンティティの確立については、今後も注視していく必要がある。多民族国家であるシンガポールにおいて、アイデンティティを一概に定義することは今すぐにはまだ難しいと考える。中華系、マレー系などそれぞれの民族がそれぞれの言語、宗教、文化を有しており、あるいは多民族であることそのものがアイデンティティといえるかもしれないが、多様なコンテンツの中で明確な共通項を探そうとするとなかなか特定が難しい。文化芸術政策を通して、シンガポール国民が自身のアイデンティティを今後模索していくことになるのではないかと論じたが、シンガポールがどのようなアイデンティティを回答として導いていくのか、今後も調査、検証が必要である。

本調査を通じて、文化芸術を活用したシンガポールの経済成長戦略やグローバル都市化戦略を学ぶことができたのと同時に、国家や地域のアイデンティティ構築に関しても考えさせられるものがあった。昨今、日本においては、在住外国人と市民との共生

を図るための多文化共生が推進されて久しい。シンガポールが国家としてのアイデンティティを模索しているのと同様に、日本でもそれぞれの多文化社会におけるアイデンティティを模索しないといけない日はもうすぐそこまで来ているといえよう。あるいは、それぞれのコミュニティが地域固有のアイデンティティを確立し、大切にすることが、文化、言語等背景が異なる人種同士の相互理解や共助の一助となるかもしれない。本論文がそういった考察において、何かの気づきになれば幸いである。

参考文献

１　書籍、報告書等

◯田村慶子（2013）『シンガポールを知るための 65 章（第３版）』明石書店

◯（一財）自治体国際化協会（2013）『クレアレポート No.392　シンガポールにおける外国人受入施策』

◯川崎賢一（2016）『リー・クアンユーの死とシンガポールの文化政策・文化制度の将来』駒澤大学

◯峯山政宏（2018）『なぜ？シンガポールは成功し続けることができるのか』彩図社

◯川崎賢一（2006）『トランスフォーマティブ・カルチャー』勁草書房

◯志賀野桂一（2014）『熱帯グローバル創造都市国家・シンガポール急成長の謎に迫る―そのダイナミック・ケイパビリティと文化政策―』創造文化フォーラム

◯（一財）自治体国際化協会（2018）『シンガポールの政策　文化芸術編』

◯（一財）自治体国際化協会（2015）『クレアレポート No.420　シンガポールの教育制度改革について』

◯佐々木宰、中西紗織、福田隆眞（2014）『シンガポールの芸術振興政策と芸術教育：School of the Arts Singapore の事例』北海道教育大学紀要、教育科学編

◯（一財）自治体国際化協会（2015）『クレアレポート No.416　シンガポールの英語教育について』

◯RENAISSANCE CITY REPORT（2000）

◯RENAISSANCE CITY 2.0（2005）

◯RENAISSANCE CITY PLAN Ⅲ（2008）

◯THE REPORT OF THE ARTS AND CULTURE STRATEGIC REVIEW（2012）

◯Singapore Budget 2018（2018）

◯Singapore Cultural Statistics（2016）

◯Lily Kong（2012）, “Ambitions of a Global City：Arts, Culture and Creative Economy in “Post-Crisis” Singapore”

２　ウェブサイト

◯SOTA（https://www.sota.edu.sg/about-us）

◯Ministry of Culture, Community and Youth（文化コミュニティ青年省）（https://www.mccy.gov.sg/About-us.aspx）

◯文部科学省 2018 年度予算（http://www.mext.go.jp/a_menu/yosan/h30/1394803.htm）

◯National Arts Council（芸術評議会）（https://www.nac.gov.sg/aboutus/mission-vision.html）

◯NOISE SINGAPORE（https://www.noisesingapore.com/About-Noise）

（https://www.noisesingapore.com/Programmes/Partnerships）
◯National HeritageBoard（国家遺産局）（https://www.nhb.gov.sg/who-we-are/about-us/mission-and-vision）
◯Nanyang Academy of Fine Arts（http://www.nafa.edu.sg/）
◯Lasalle College of the Arts（http://www.lasalle.edu.sg/）
◯National University of Singapore（https://www.ystmusic.nus.edu.sg/）
◯Nanyang Technological University
（http://www.adm.ntu.edu.sg/Pages/index.aspx）
◯National Museum of Singapore（http://nationalmuseum.sg/）
◯teamLab（https://www.teamlab.art/jp/w/story-of-the-forest/）
◯ARTLOGUE（https://www.artlogue.org/morisako-story-of-the-forest/）
◯National Gallery Singapore（https://www.nationalgallery.sg/）
◯Singapore Art Museum（https://www.singaporeartmuseum.sg/）
◯Art Science Museum
（http://www.marinabaysands.com/museum.html#pdApkyiUzuep61H3.97）
◯Esplanade Theatre（https://www.esplanade.com/）
◯Peranakan Museum（http://peranakanmuseum.org.sg/）
◯Visit Singapore（http://www.visitsingapore.com/ja_jp/see-do-singapore/culture-heritage/heritage-discovery/peranakan-museum/ ）
◯The Nation（http://www.nationmultimedia.com/detail/asean-plus/30337286）
◯History SG（http://eresources.nlb.gov.sg/history）
◯美術手帖（https://bijutsutecho.com/magazine/news/headline/19173）

3　報道関係
◯The Straits Times

4　その他
◯事務所職員による現地視察報告書

5　写真
本稿に掲載している写真は全てクレアシンガポール事務所職員撮影のものである

【執筆】
一般財団法人自治体国際化協会　シンガポール事務所
所長補佐　川﨑　晃斗

【監修】
所長　天利　和紀
次長　渡邊　美香
調査員　HE　Tingshan